

岩宿時代の局部磨製礫をめぐる分布論

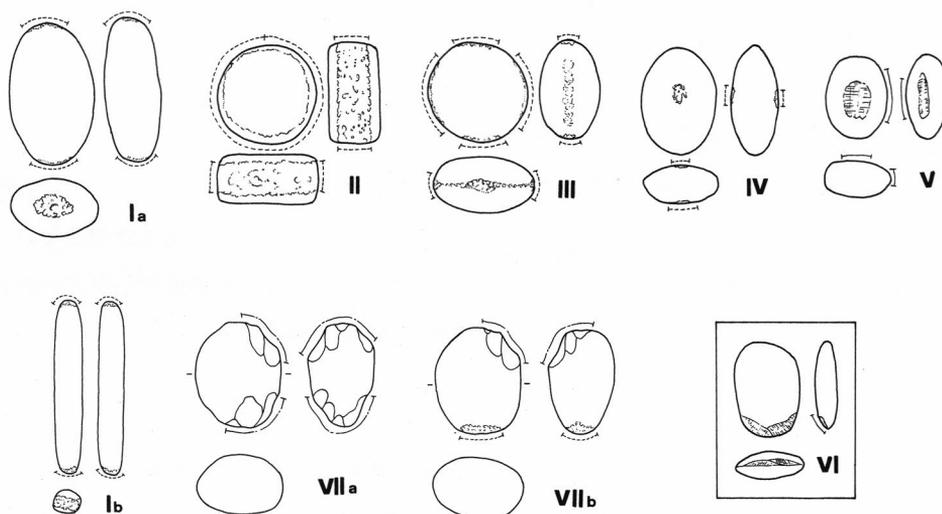
黒坪 一 樹

1. はじめに

小論は岩宿時代^(注1)の局部磨製礫をとりあげて、資料の呈示と分布状況の観察を行い、局部磨製礫のもつ性格の一端を考えるものである。

局部磨製礫は扁平な礫の先端部の一端あるいは両端に、平坦な磨面を形成する岩宿時代特有の石器である。岩宿時代の敲石類を集成し、形態区分をしたものの中では第Ⅵ類に相当する(第Ⅰ図^(注2))。「磨る」という作業痕跡の少ない岩宿時代の敲石類の中で、きわめて異彩を放つ資料である。資料点数が少ないこともあって、分布状況や用途の推定についての考察が、以前においてはできなかった経過がある^(注3)。今日においてさえ、局部磨製礫の出土例は他の敲石類に比べると極端に少なく、全国的にみてもわずかなものである。報文中で個別にとりあげられてはいるが、全体的に検討されたことはこれまでなかった。

局部磨製礫を集成していく中で、特に分布に関し、時期的にはナイフ形石器文化期のある段階に、地域では東海地方に集中する傾向のあることが次第に明らかになってきた。岩



第1図 敲石類形態区分概念図(I a～VII b類)

(破線は敲打痕、実線は磨痕、一点破線は打撃による剝離痕を示す。)

宿時代の敲石類全体における局部磨製礫の出自や用途を考える際、局部磨製礫の属性を詳細に記載することと、分布状況をさまざまな角度から検討することこそまず取り組むべき課題であると考えた。岩宿時代における敲石類の全体像を解明する上で、局部磨製礫の理解は不可欠なものであろう。

2. 研究史

局部磨製礫の具体的な記述を始めるに先立ち、これまでの取り上げられてきた経過を簡単に振り返っておこう。

最初の出土例は、昭和38年に磨石として報告された山形県横道遺跡出土のものである^(注4)。昭和34年に報告された新潟県神山遺跡^(注5)の磨石を引用して、岩宿時代における磨石の確かな存在に言及されている。ここでは骨角器の製作具と想定された。次に昭和41年、静岡県磐田市の池端前遺跡から出土した5点の局部磨製礫の報告がある^(注6)。磐田原台地における初めての出土例で、1遺跡内からの出土点数の多さが注目された。局部磨製礫以外の磨石・敲石を植物質食料の調理加工具に想定する一方、局部磨製礫は砥石と記載され、それらの用途についてはやはり骨角器製作用と想定された。池端前遺跡の報告は、植物食利用具としての敲石類が岩宿時代に確実に存在すると言及した点で大きく評価されよう。そして昭和52年、同じく磐田原台地の寺谷遺跡から2点の資料が報告された^(注7)。その正式報告書において初めて局部磨製礫の名称が与えられ、資料の形態および使用痕の詳細な観察、類例の検討、さらに用途の考察など詳しい報告がなされた。報文中、磨面と表裏面との角度の付けられ方、磨面と反対側にみられる顕著な打撃痕の存在から、「一種の楔または手斧形石器あるいは、手持の削平用の道具」の可能性が一応の結論として打ち出された。しかしながら磨面を刃部とするには、あまりにもエッジに鋭利さが欠如している点を指摘され、用途についてなお慎重に検討すべき必要性が説かれた。

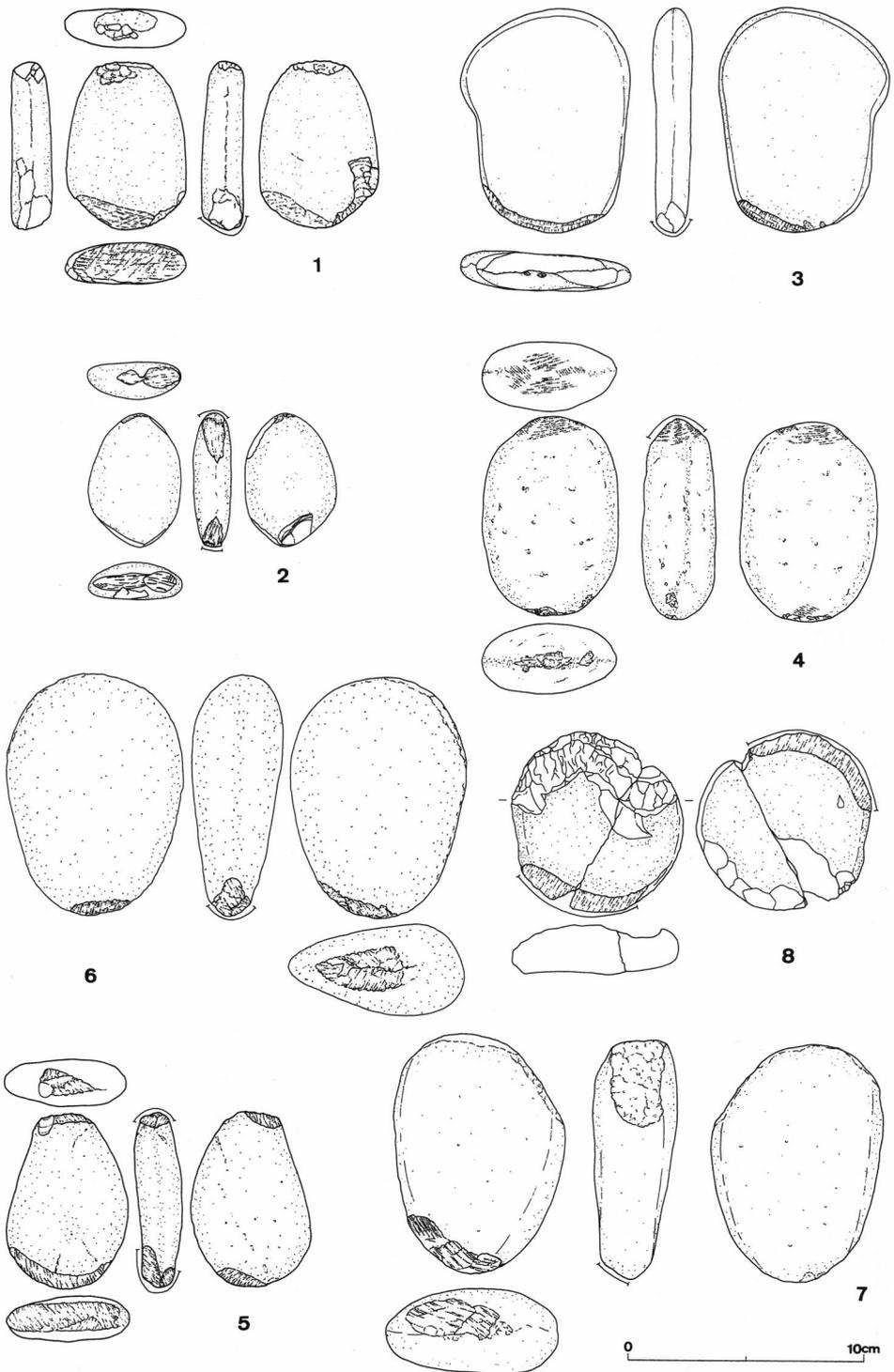
その後も磐田原台地の広野北遺跡^(注8)・山田原遺跡群^(注9)などから出土例が相次ぎ、とくに広野北遺跡例では石器ブロックとの分布について詳しく観察している。また局部磨製礫という名称についても寺谷遺跡以来、静岡県広合^(注10)、埼玉県鶴ヶ丘E地点^(注11)、熊本県狸谷などの各遺跡の報文中で用いられ、全国的に定着しつつ今日にいたっている。

3. 資料呈示

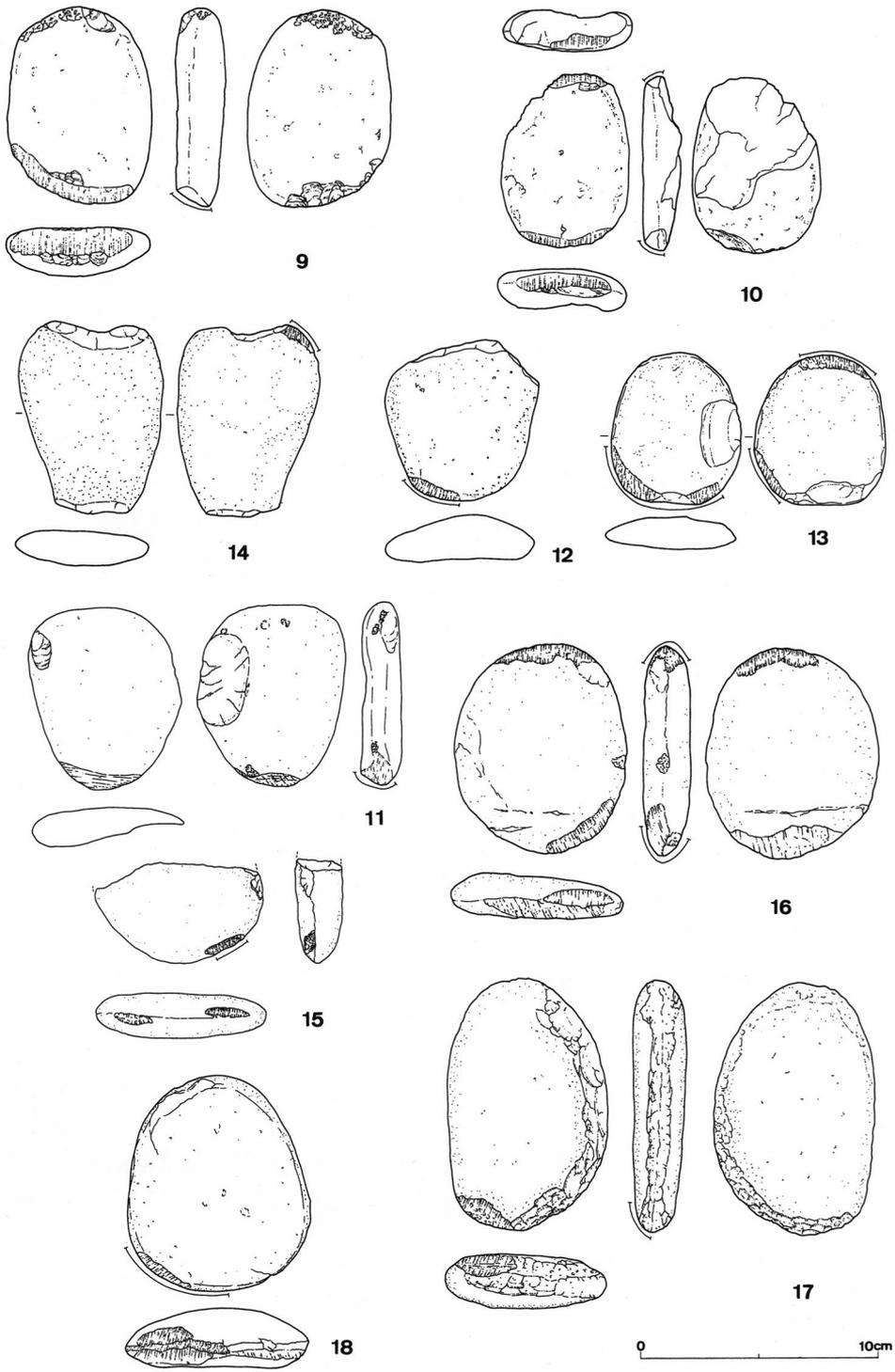
ここに、全国集成した岩宿時代における局部磨製礫の一覧表および実測図を呈示する(付表1・第2～5図)。一文化層一遺跡として出土遺跡数は16遺跡、点数にして39点を数える。図示した局部磨製礫を中心に、それらの形態、法量(長さ・幅・厚さ・重さ)、石材

付表1 岩宿時代における局部磨製礫出土遺跡一覧表

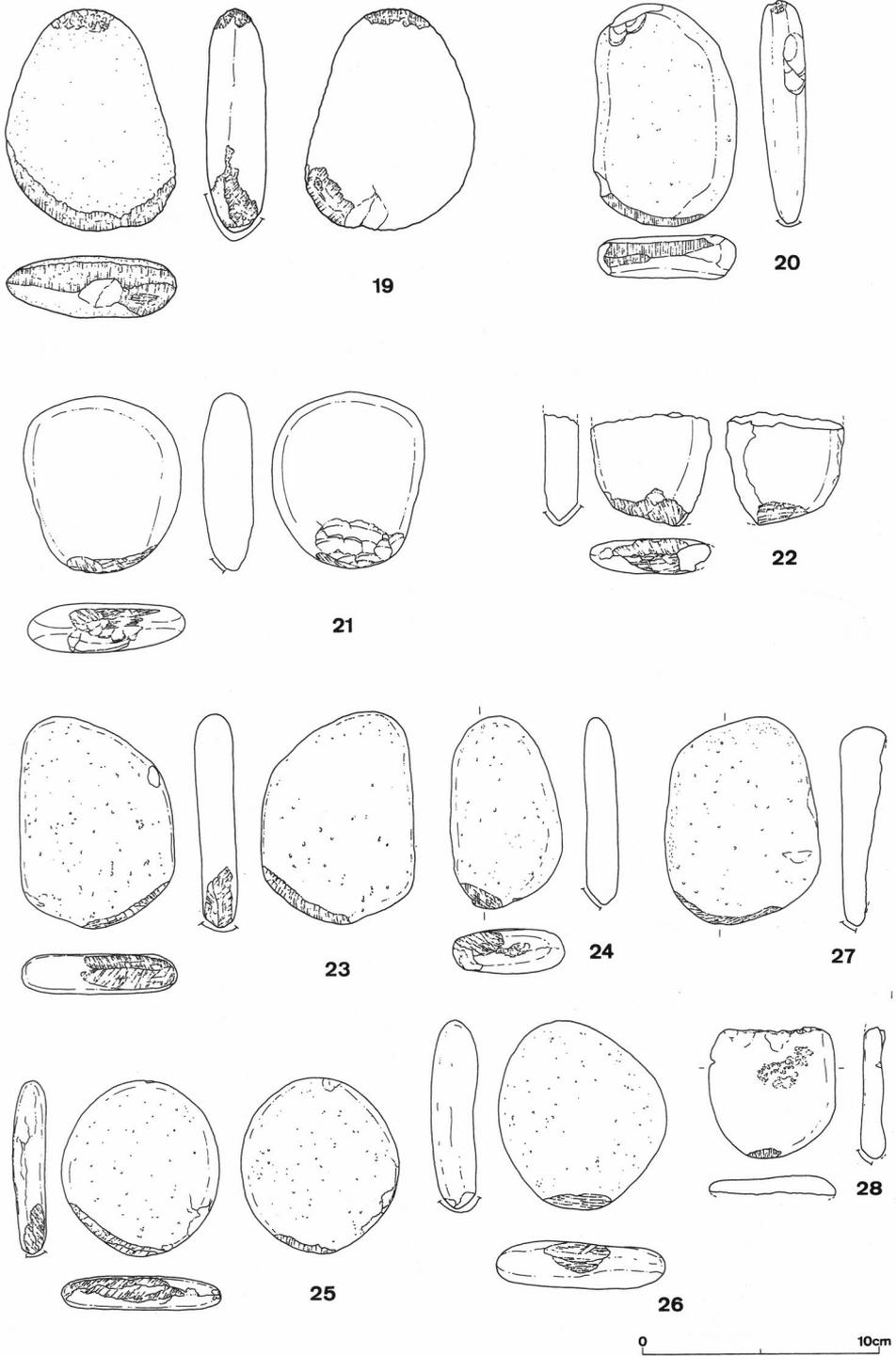
遺跡名	層位・ 文化層	時期(k n 標式)				出土 点数	法量(cm)			石材	挿図 番号	文献	備考
		II 前	II 後	III	IV		長(残)	幅(残)	厚(残)				
【山形】 1. 横道	第2層				○	1	7.1	5.1	1.8	安	1	加藤他 1963	鈴木忠司 氏採集
2. 鳥谷沢	表採					1	5.8	3.7	1.7	砂	2		
【埼玉】 3. 鶴ヶ丘E	第II層				●	1	9.6	7.1	1.5	砂	3	岩瀬他 1985	
【東京都】 4. 鈴木	V層				●	1	8.5	5.8	3.1	砂	4	館野他 1980	2点の接 合資料
5. 烏山南原	III層				●	2	7.6	5.2	2.0	砂	5	武田他 1987	
	同上				●		10.3	7.5	3.9	砂	6	同上	
【長野】 6. 仲町	上部野 尻ロー ム黄褐 ローム				○	1	10.2	7.2	3.4	砂	7	中村他 1987	
【静岡】 7. 広合	第I文 化層				○	1	7.7	7.3	2.2	安	8	高尾他 1987	
8. 寺谷	II層				○	2	7.4	5.4	1.6	凝	9	鈴木他 1980	
9. 池端前	同上 II層				○ ○	5	8.3 7.7	6.2 6.2	2.2 1.4	凝 凝	10 11	同上 麻生他 1966	
	同上				○		6.9	5.8	1.5	凝	12	同上	
	同上				○		8.3	5.9	1.9	凝	13	同上	
10. 広野北	同上 K2				○ ○	4	7.2 (4.2)	6.9 7.2	2.0 1.9	凝 砂	14 15	同上 山下他 1985	
	同上				○		9.8	7.3	2.1	砂	16	同上	
11. 広野北	同上 K3		○		○	2	11.8 9.3	6.8 7.1	2.3 2.6	砂 砂	17 18	同上 同上	
12. 勾坂上2	同上 IV層		○		○	2	9.3 9.5	7.6 6.2	2.7 1.9	凝 凝	19 20	同上 山崎他 1984	
13. 勾坂中	K2				○	8	7.6	6.7	2.1	砂	21	鈴木他 1994	
	同上				○		(4.9)	5.1	1.5	凝	22	同上	
	同上				○		9.1	6.6	1.7	凝	23	未報告	
	同上				○		8.2	4.8	1.9	凝	24	同上	
	同上				○		7.6	6.7	1.5	凝	25	同上	
	同上				○		8.2	7.2	2.0	凝	26	同上	
	同上				○		8.9	6.6	(1.9)	凝	27	同上	
14. 山田原II	同上 IV層				○	6	(5.7) 9.2	5.4 7.6	(1.1) 2.2	凝 砂	28 29	同上 松井他 1994	
	同上				○		9.4	9.9	2.7	砂	30	同上	
【佐賀】 15. 磯道	3層				○	1	9.3	6.1	2.7	砂	31	堀川 1981	
【熊本】 16. 狸谷	第I文 化層		○			1	7.4	6.9	2.1	砂	32	木崎他 1987	
総数および(法量平均値)						39	(8.5)	(6.5)	(2.1)				



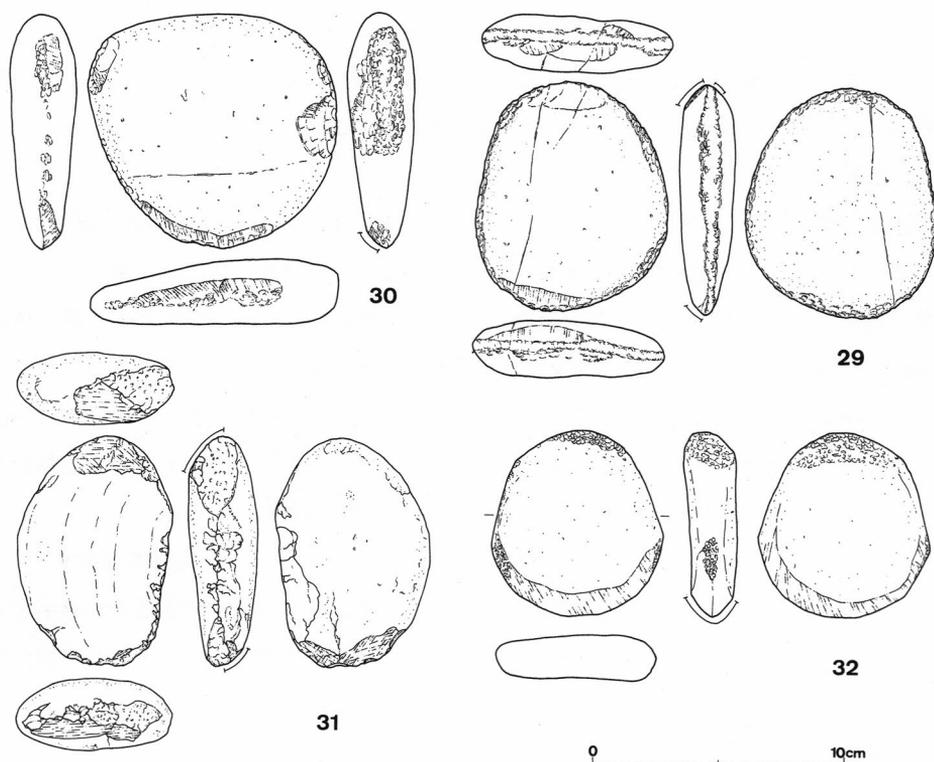
第2図 局部磨製礫実測図(1) 実線は磨面部を示す。



第3図 局部磨製礫実測図(2)



第4図 局部磨製礫実測図



第5図 局部磨製礫実測図(4)

についての特徴を明らかにしていく。

A. 形態

局部磨製礫は中～小型の扁平な円礫を用い、礫の末端に平滑な磨面を有することにまず大きな特色がある。礫の平面形は小判に近い楕円形が多い。岩宿時代の他の敲石類の礫形態と比較して、規格が揃っている点に注目すべきであろう。

磨面は意識的な研磨によるものか、何らかの使用によって結果的に磨れて形成されたものか、その判断はやはり難しい。この点については、磨面にみられる細かな擦痕の観察は有効であるが、肉眼による観察のかなわないものも多く今後の課題としたい。さて磨面の形状についてみると、磨面が礫の表面に弧状に形成されていたり、表裏面で切り合ったりして、あたかも刃部のように形成されているものが38点(97%)で圧倒的に多く、表裏面に対し直角近くまで磨り減って形成されているものは鳥谷沢例の1点のみである。石斧の刃部のような鋭さはないが、表・裏面に対し角度のつけられているものが圧倒的に多い。対象物に斜めにエッジをあてて使用したのであろう。やはり刃部的な性格は否定できない。また磨面は素材の先端部にみられ、そこの側面部および磨面に対する先端部が強い打撃に

よる剥離痕あるいはこつこつとした敲打痕で面的に潰れている例が、18点(46%)という高率で存在している。これは本来の使用後に敲石・槌石として再利用されたか、あるいは楔のように使って対象物に打ち込む際に反対側の端部を敲いたものと思われる。磨面そのものの刃部らしからぬ鈍さとは裏腹に、苛酷な作業に使用されたことが窺えよう。

B. 法量

局部磨製礫の法量(長さ・幅・厚さ)の全国平均値は、長さ8.5cm・幅6.5cm・厚さ2.1cmを測る。長さの最大・最小値は11.8cm・5.8cmで、この2点はやや突出しており、これらを除けばすべて平均値の前後2割の範囲にはいる。幅については、その最大・最小値は9.9cm・3.7cmで、やはりこの2点を除けば平均値の2割内にすべての資料が入る。厚さの最大・最小値は3.9cm・1.4cmである。厚さの3.9cmは1点で、大きく突出する。厚さ1.4cmのものも1点であるが、1.5cmのものが4点あり、突出しているとはいえない。全体に3cmを越えるものは3点しかなく、1.5~2.5cmに22点(73%)の資料が占める。

また重さについては、一部データが揃わず表には記載していないが、全体の平均値は150g前後になろう。おそらく300gを越えるものは2~3点で、150~200g前後に集中するとおもわれる。以上の点から素材の形態と同様、局部磨製礫の法量もきわめて規格揃いである。

C. 石材

石材には砂岩、凝灰岩、安山岩が用いられている。それぞれの割合は砂岩15点(47%)凝灰岩15点(47%)・安山岩2点(6%)となる。比較的軟質の石材が選択されているのは明らかである。

凝灰岩製のものは磐田原台地の遺跡から特徴的に出土している。軟質でやや風化の進んだ黄白色の凝灰岩である。当地においては22点中15点で、ほぼ7割近い高率で用いられており、局部磨製礫を代表する石材となっている。砂岩は東北地方~九州地方までの遺跡で広く用いられている。

4. 出土時期

局部磨製礫の出土時期には明らかな偏りがあり、例外なくナイフ形石器を標識とする時期にあっている。さらに詳しくみてみよう。付表1に示した時期は、南関東編年のI~Vの5期を新たに代表的な遺跡名を冠して設定された鈴木忠司氏の時期区分を採用している。^(注13)なお●と○の表記は、南関東の文化層対照遺跡とそれら以外の併行期遺跡の時期を示す。これで見ると特にIV期(砂川文化)に集中し、全15遺跡・38点のうち12遺跡(80%)・34点(89.5%)の資料がある。これより以前ではII後期(寺尾VI文化)のAT(始良・丹沢パ

ミス)を前後する段階に2遺跡(13%)・3点(7.9%)、Ⅲ期(岩宿Ⅱ文化)に1遺跡(7%)・1点(2.6%)を数えるのみである。砂川文化期にこのように集中する現象は、敲石類の他の形態のものにはみられないことであり、局部磨製礫に特有のものといえる。岩宿時代前期、槍先型尖頭器・細石器の時期さらに縄文時代草創期にいたっても出土例は^(注15)ない。局部磨製礫の出自や用途を考える上から、当該期における石器群の内容は非常に重要な鍵を握っていると言えよう。

5. 分布

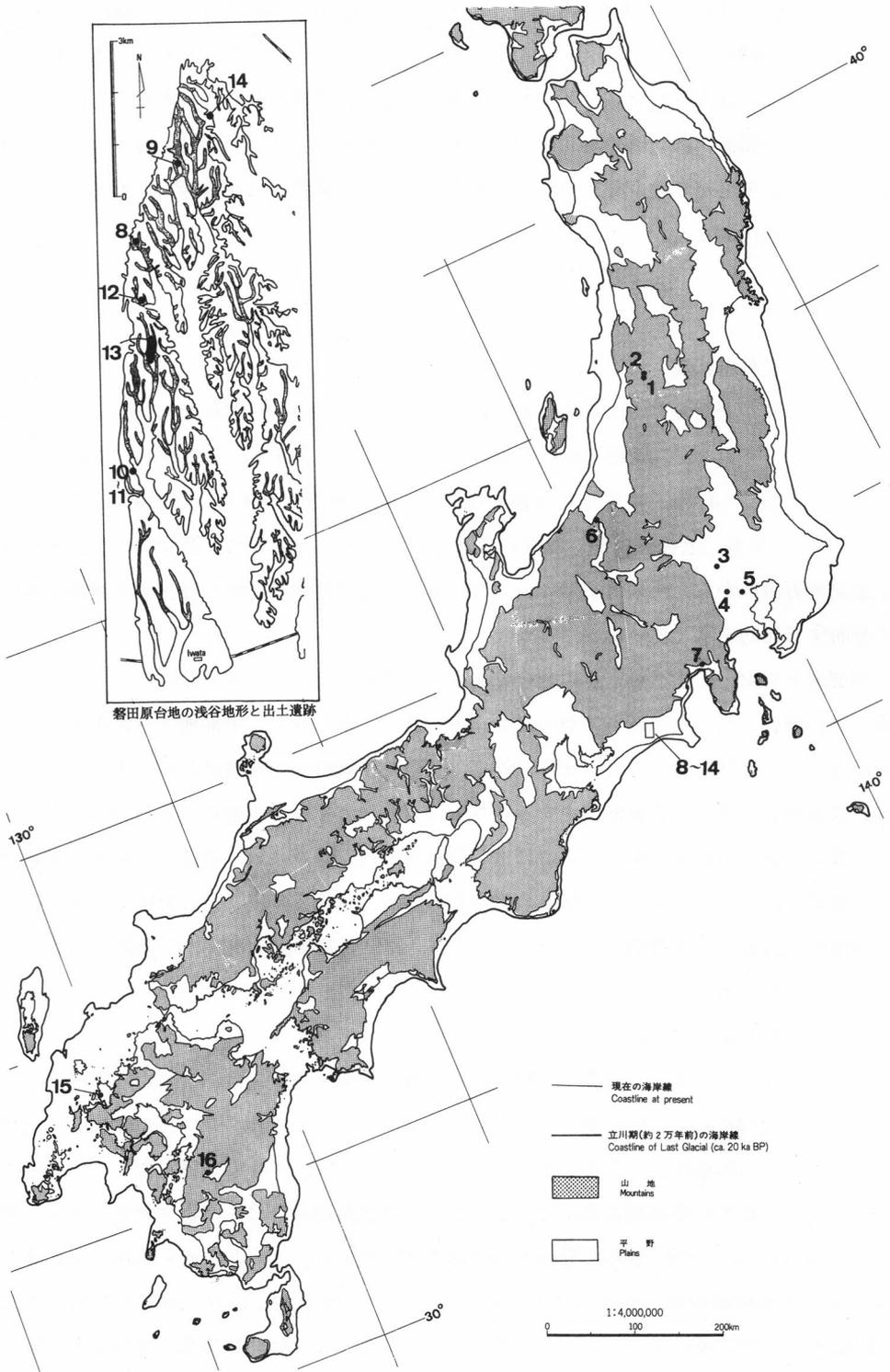
A. 地方別分布状況

局部磨製礫が全国のどこから出土しているのか、そしてその分布状況にどのような偏りがあるのかみておく。16遺跡(39点)の資料分布を地方別にみると、東北地方2遺跡(2点)、関東地方3遺跡(4点)、中部地方9遺跡(31点)、九州地方2遺跡(2点)である(付表1・第6図)。北海道、近畿、中国、四国の各地方には現在のところ出土例はないが、おそらく東北地方南部から九州地方までの、いわゆる砂川文化期遺跡の多く存在する地域に幅広く分布する傾向を示しているのだろう。

中部地方を除いて1遺跡1点の割合であり、1遺跡内でのあり方も極めて少ないと言える。資料割合の高い中部地方についてももう少し詳しくみてみる。中部地方を太平洋側の東海地方とそれ以外に分けると、それ以外では長野県信濃町の仲町遺跡からの1点のみであり、東海地方に多くの資料が集中する。さらに東海地方でもある地点に著しい集中をみせる。静岡県磐田原台地である。ここには7遺跡(29点)が確認され、遺跡では全体の半数近く、遺物にいたっては実に70%以上の集中をみせる。平成6年度までの磐田原台地における岩宿時代遺跡の発掘件数^(注16)13件を100とすると、局部磨製礫出土遺跡の7遺跡は54%という高い出現率である。

B. 植生帯および立地について

局部磨製礫の出土遺跡の分布が、特定の植生帯に集中する傾向はあるのだろうか。筆者はかつて全国の敲石類の出土遺跡の分布を、古植生帯のなかで観察し、どの植生帯に遺跡が多く分布するのか検討したことがあった。^(注17)そのねらいは、生食も可能であるクリ、クルミ、ハシバミなどの堅果類を利用し得る冷温帯落葉広葉樹林帯に、植物質食料利用具と想定した敲石(I a～V類)が多く分布するであろうと考えた。しかしながら遺跡の文化層とウエルム氷期最寒冷期の時間的ズレの大きさや、特に関東地方における植生の扱いが図(塚田1974・安田1980)によって大きく異なることなどから、冷温帯落葉広葉樹林帯と敲石出土遺跡との関係はいまひとつ明確にはならなかった。



第6図 出土遺跡分布図(日本第四紀学会編1987・鈴木忠司編『寺谷遺跡』1980から抜粋・改図)

ここで注意すべき点は、花粉分析学の成果をもとにいうところの植生帯(亜寒帯針葉樹林帯や冷温帯落葉広葉樹林帯など)とは、「固有の土地に実際に生育する具体的な自然では^(注18)ない」ということである。敲石出土遺跡のまわりにチョウセンゴヨウやブナなりクリなりが確実に生育していることではないのであって、ましてやそれらを利用していたとは言えないことである。植物の分布は気候や地理だけでなく多様な要因で決定され、ブナ属・マツ属などの属階級以上では複数の気候帯にまたがるのが普通であるとされる(相馬・辻1987)。また植生図についても「更新世を通じて植物化石の記録は多数に及ぶが、層位的に未解決な問題が多く、それら各地点からの化石記録を年代にもとづいて対比し、面的な広がりをもった、いわゆる“植生図”を作成することは、現段階では困難である」とも指摘される(同1987)。こうした点からすれば、出土遺跡は東北、関東、中部、九州地方と、確実に複数の植生帯にまたがって存在し、特定の植生帯との関係については不明であると言わざるをえない。ただ遺跡の集中する磐田原台地については、地理学的特徴や幅広い植生のあり方に今後とも注意をはらう必要がある。

出土遺跡の立地については、野尻湖西岸の仲町遺跡以外はすべて平野(段丘台地)から標高200mまでの丘陵地にかけて立地している。仲町遺跡も標高こそ650m前後と高いが、湖水面より5~15m高い丘陵平坦部(250×50m)にあたり、丘陵地である点では共通して^(注19)いる。やや特異な立地をもつのが狸谷遺跡である。球磨川の支流である西川内川の段丘台地ではあるが、いくつかの深い谷にはさまれて狭く、西側の山地につづく山麓との境に当たっているといえる。^(注20)

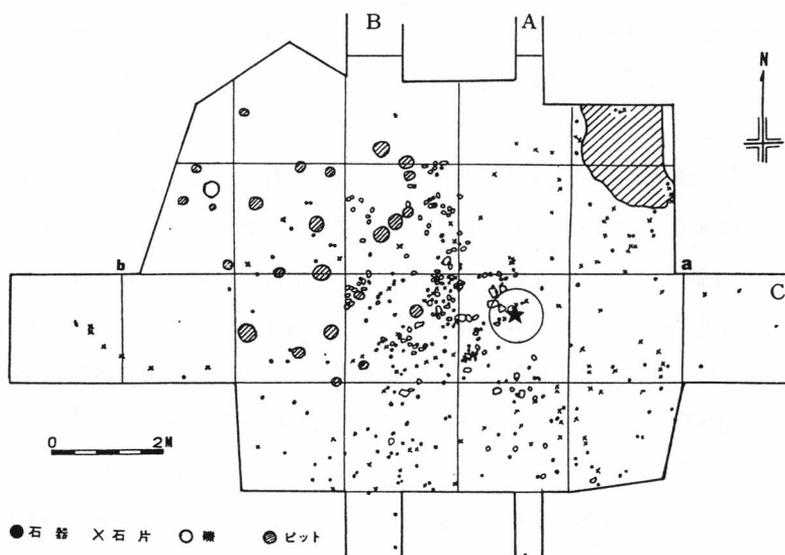
C. 遺跡内分布状況

①資料

遺跡内における局部磨製礫の分布状況にどのような特徴があるかということは、局部磨製礫そのものの理解のみならず、石器ブロックや礫群・配石などの理解にとって重要な問題を含んでいるとおもわれる。このため局部磨製礫の出土遺跡のなかから、その出土位置が明確な例を抽出し、その位置を述べたのち石器ブロック、礫群、配石があればそれらとの位置関係を観察しておきたい。さらに局部磨製礫と近接して分布している石器の器種にも一定の特色が見られるとおもわれるので、この点についても若干の観察を加えたい。分布図(第7~10図)には局部磨製礫を中心として半径50cmの範囲を入れてある。最初に各地の遺跡ごとにみていこう。

◆横道遺跡(第7図、加藤他1963)

南北10m、東西14mの発掘区に、石器ブロック・礫群・配石・土坑などが確認されている。石器ブロックの基数は不明であるが、発掘区の中央に1つの密集域がある。局部磨製



第7図 局部磨製礫(★)遺跡分布図(1)

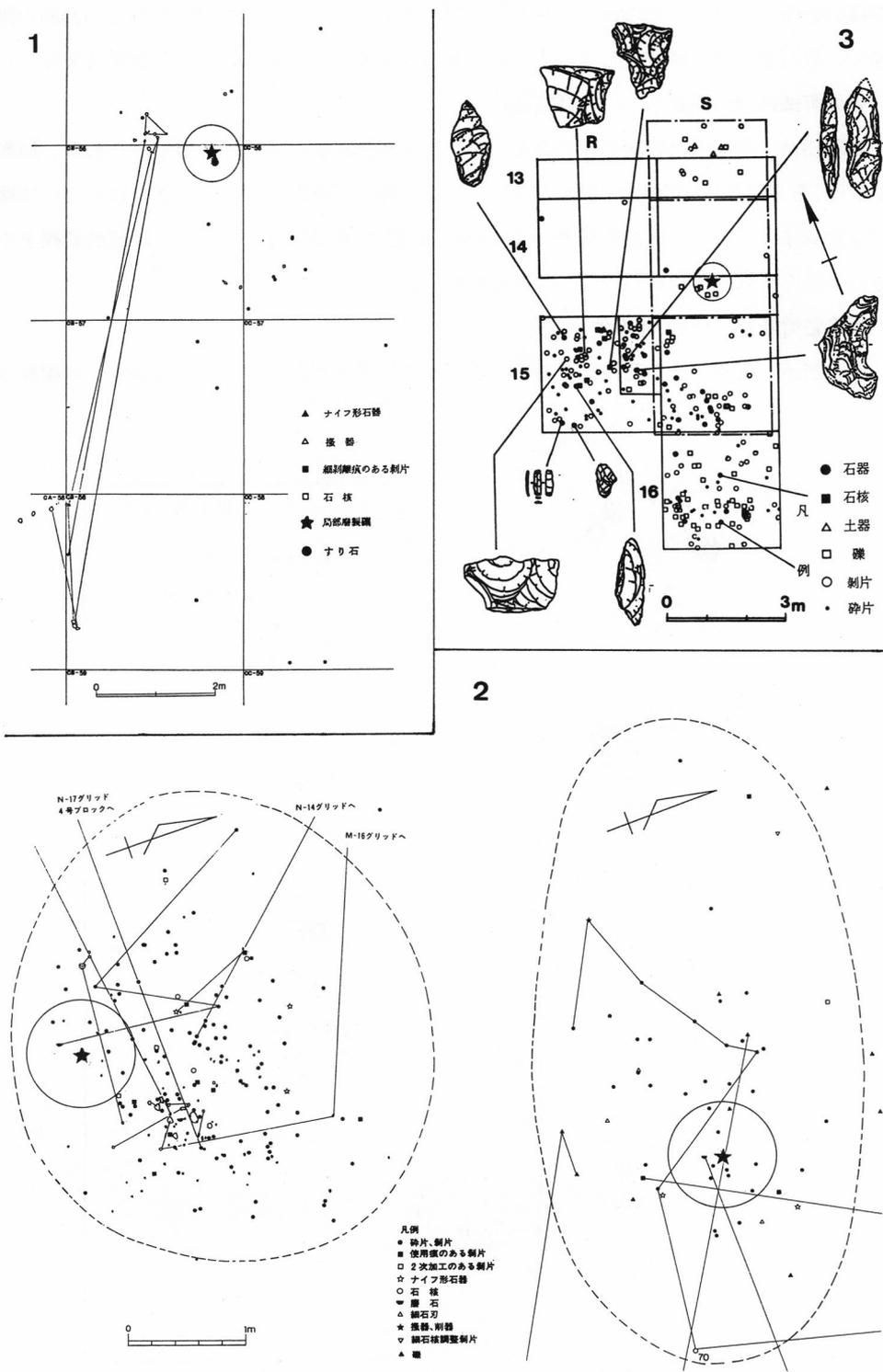
礫(第2図1)はこの石器ブロックの東側外縁部に位置している。礫群は石器ブロックとほぼ重なっており、その意味から局部磨製礫は礫群の東外縁部に分布しているといえる。さらに礫群の東に隣接して配石があり、局部磨製礫はこれにほぼ接している。この配石は直径20cm前後の礫が数個、半円形にならんだもので、報文中には「石器製作の台石的存在」とある。

◆鶴ヶ丘E区遺跡(第8図-1、岩瀬他1985)

90㎡の調査区(集中区B)において局部磨製礫1点、敲石1点、石核1点、剥片・小剥片22点、礫20点が分布している。局部磨製礫(第2図3)は石核、剥片・小剥片とは完全に離れて分布している。礫は大きく3ヵ所に集中し、数点が集中する北側の礫集中箇所と局部磨製礫との距離は約1mである。また1点ある敲石(V類 第1図による、以下同じ)は局部磨製礫の南にわずか13cmの距離に分布している。

◆烏山南原遺跡(第8図-2、武田他1987)

南北29m、東西24mの発掘区である。ここに5基の石器ブロック(1~5号)と3基の礫群(1~3号)が存在している。局部磨製礫は南北3.6m、東西4mの範囲をもつ2号ブロックと、南北2.8m、東西5.5mの4号ブロックから1点ずつ出土している。2号ブロックの局部磨製礫(第2図5)は、ブロック外縁部に位置している。礫群も2号ブロックとほぼ重なるため、礫群との位置関係も外縁部であるといえる。局部磨製礫(第2図6)の南西方向約20cmのところには破碎の著しい敲石類(Ⅱ類)が分布している。4号ブロックでの局部磨



第8図 局部磨製礫(★)遺跡内分布図(2)

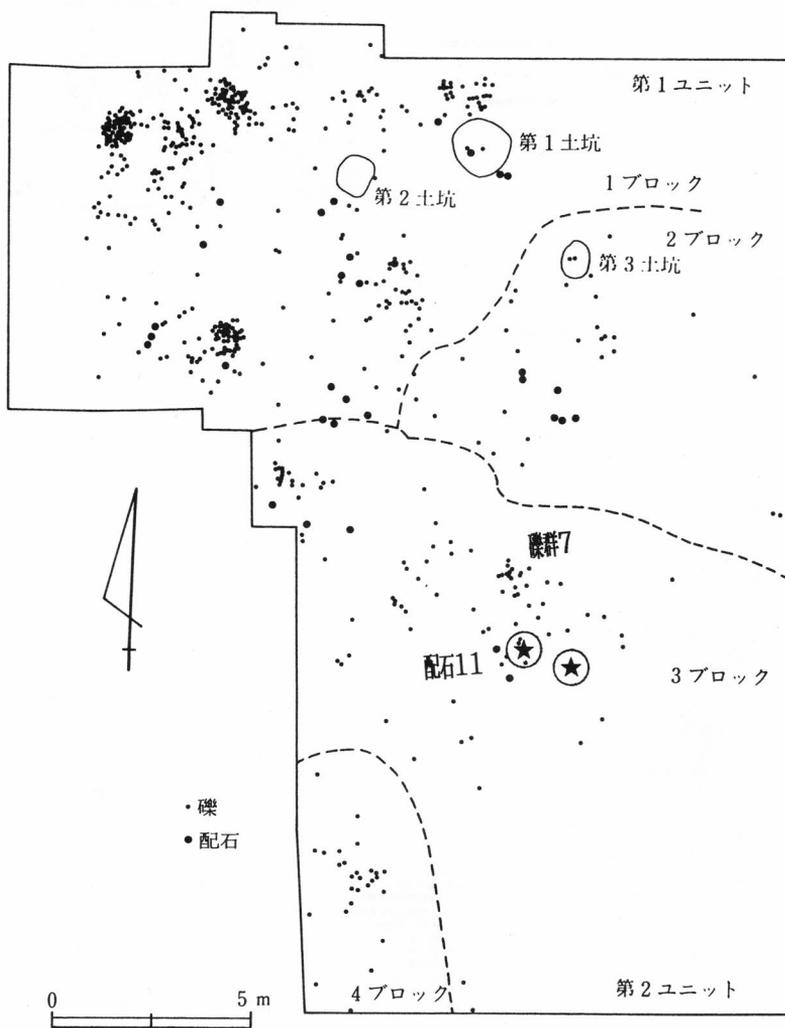
製礫の分布は、ブロックのほぼ中央部に位置している。ここでも局部磨製礫と20cm弱の距離で、敲石類(Ⅲ類)が分布している。この敲石は2号ブロックの破片と接合関係をもつ。

◆仲町遺跡(第8図-3、中村他1987)

南北13m、東西6mの調査区である。調査区南西側に広い遺物の集中がみられる。局部磨製礫(第2図7)は遺物集中部から北西に約2m隔てて分布している。さらにそこには礫が5点集まっており、局部磨製礫はこの礫群(配石?)にはほぼ接してある。局部磨製礫を中心に半径1m以内には石器の分布はみられない。

◆寺谷遺跡(第9図、鈴木他1980)

南北25m、東西15mの発掘区である。ここから12基の石器ブロック、11基ずつの礫群と



第9図 局部磨製礫(★)遺跡内分布図(3)

配石、落とし穴状の土坑などが確認されている。2点の局部磨製礫はともに、石器点数が2181点で最も多い3bブロック内に分布している。分布位置はブロック中央部に含まれよう。局部磨製礫の北東約2mのところは総数44個の第7礫群がある。2点の局部磨製礫のうち1点(第3図9)は完全に礫群からは外れているが、もう1点(同図10)は外縁部に位置している。さらに第7礫群の南に第11配石がある。局部磨製礫のうち1点(同図10)は配石中心部から約60cm、もう1点(同図9)は約1.5mの距離にある。半径50cm内に近接する遺物には、使用痕ある剥片(以下UF)3点とナイフ形石器6点がある。

◆**広野北K2遺跡**(山下他1985)

南北約60m、東西約68mの広さをもつ発掘区(中央区)である。ここからは、21の石器ブロック、36基の礫群、48基の配石が検出されている。当区には局部磨製礫3点が、石器ブロック内・ブロック外縁部・ブロック外にそれぞれ1点ずつ分布している。礫群との位置関係は、1点は完全に礫群外であるが、2点は礫群の範囲内に入ってしまう。さらに配石については、3点の局部磨製礫の半径3m以内には配石は存在していない。局部磨製礫と半径50cm内に近接する石器にはUF1点、二次加工ある剥片5点、敲石(Ia類)1点がある。

◆**匂坂中遺跡**(鈴木他1994)

エリアN4の発掘区からは、石器ブロック8基、礫群31基、配石41基、礫ブロック4基が確認された。局部磨製礫(第4図21)は約10×6.5mのブロックA66内に分布する。そしてこのブロックA66と重複する礫群が3基あり、局部磨製礫は礫群の間隙を縫うように礫群の外縁部に分布している。また配石も礫群に接して存在し、局部磨製礫との距離はほぼ50cmを測る。ブロック内において近接する遺物には、UFと敲石(II類)があり、それぞれ50cm、1mの距離をおいている。

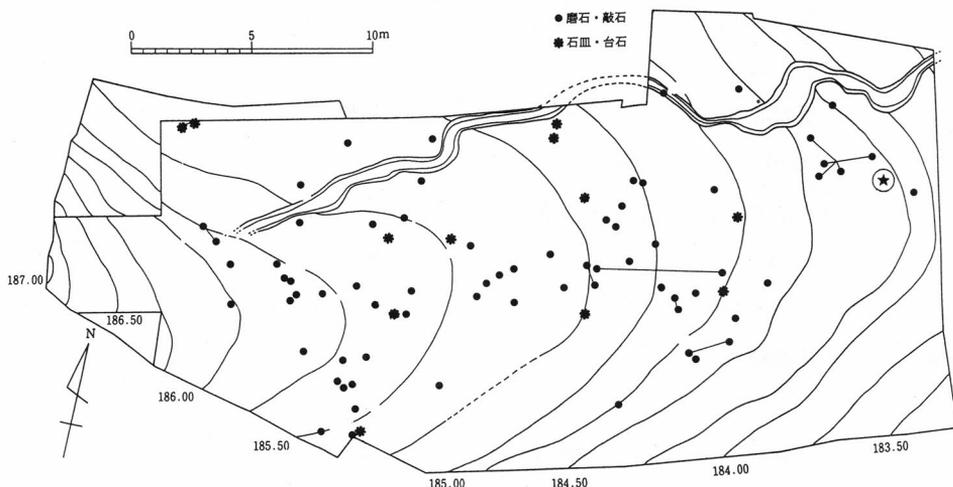
エリアN5の発掘区からは、石器ブロック7基、礫群8基、配石6基が確認されている。局部磨製礫(同図22)は、約19×13mを測るブロックA72の外縁部にある。ブロックA72は5基の礫群が重複しており、局部磨製礫は北側にある最も大きな礫群の外縁部に位置している。配石は、局部磨製礫から東へ約6mのところ(ブロック外)に位置している。

◆**磯道遺跡**(堀川1981)

およそ24×22mを有する調査区である。ここから5基の石器ブロック、1基の配石遺構が確認された。1点の局部磨製礫(第5図31)はいずれの石器ブロックとも、また配石遺構ともかなりの距離をおいて分布している。最も近い調査区東側のⅢAブロック中心部からは約5.2m、配石遺構からは約12m離れている。

◆**狸谷遺跡**(第10図、木崎他1987)

南北約37m、東西約15mの調査区である。多くの石器ブロックが全域に存在しているが、



第10図 局部磨製礫(★)遺跡内分布図(4)

石器がより顕著に密集するのは調査区西側である。局部磨製礫1点(第5図32)は石器分布が徐々に散漫になってくる調査区東端近くに位置する。礫群、配石はみられない。また局部磨製礫と近接する石器には、UF 2点が50cm内に、ナイフ形石器2点と敲石2点(ともにI a類)が1.5m内に分布している。敲石の1点は接合資料で激しく破碎している。

②石器ブロック・礫群・配石

以上、局部磨製礫の遺跡内における分布を石器ブロック、礫群、配石との関係で観察してきた。これらの結果をまとめたのが付表2である。

まず石器ブロックとの位置関係については、ブロック内(中心部)に5点、外縁部に5点、ブロック外に5点で、均等な分布割合をしめしている。資料点数が少ないという問題はあるが、石器ブロック内外の特定の領域に偏る傾向はみられないと判断される。

礫群との位置関係はどうであろうか。検討資料13点のうち、礫群内に2点(15.3%)、その外縁部に5点(38.5%)、礫群外に6点(46.2%)となる。外縁部と外部をあわせると8割を越える。礫群を調理施設とするならば、火を使う礫群内にあるのは常識的に考えても不合理である。その点では、周辺で何らかの作業に用いた後も礫群内に放棄したりせず、大切に扱われていた可能性が高い。

配石についてはどうか。配石の中心(肉眼で判断される点)からの距離をみると、1.5mまでに4点(44.4%)、5mまでの距離をおくもの4点(44.4%)、さらにそれ以上離れるもの1点(11.1%)となる。配石と最も距離を置くのは磯道例で、約12mである。ここでも資料点数が少ないことに難はあるが、配石との距離1m前後に4割以上が存在する点を強調しておきたい。局部磨製礫と配石とは、互いの分布において密接な関係があると考えられる。

付表2 局部磨製礫の遺構内分布状況一覧表

遺跡名	資料 点数	石器ブロック			礫群			配石		配石中心との距離(単位m)					近接石器 (半径50cm内)
		内	外縁	外	有・無	内	外縁	外	有・無	~0.5	~1	~1.5	~5	~12	
横道	1		1		有			1	有	1					無
鶴ヶ丘 E	1			1	有			1	無						敲石1
鳥山南 原	2	1	1		有		1	1	?						敲石2
仲町	1			1	有		1		無						無
広合	1			1	有			1	有					?	無
寺谷	2	2			有		1	1	有		1	1			UF3、kn6
広野北 K2	3	1	1	1	有	2		1	有				3		敲石1
勾坂中	2	1	1		有		2		有	1			1		UF1
磯道	1			1	無				有					1	無
狸谷	1		1?		無				無						UF1、kn1
計	15	5	5	5		2	5	6		2	1	1	4	1	

③近接する石器

局部磨製礫と半径50cmまでに近接する石器についてみる(付表2)。石器の器種の内訳は、ナイフ形石器7点(43.7%)、UF5点(31.3%)、敲石4点(25%)となる。ナイフ形石器の占める割合が多いが、寺谷遺跡の6点が突出しているためである。全体には定形的な利器が少ないという印象である。さらに1遺跡での出土点数の少ない敲石が全体の25%を占めることに注目したい。敲石との距離を1.5m内にとすると、勾坂中遺跡で1点(Ⅱ類)・狸谷遺跡で2点(Ⅰa類)がさらに加わる。これら7点の敲石の形態をみると、Ⅰa類3点・Ⅱ類2点・Ⅲ類1点・Ⅴ類1点となる。すべて植物質食料の調理具と考えたものであるが、調理具とは現状では言いにくい局部磨製礫との関係が問題となるならば、敲石(Ⅰa~Ⅴ類)の用途についての再考をうながす事例と捉えなければならないのであろうか。

さらに敲石に関してであるが、鶴ヶ丘例のⅤ類の敲石は側縁部の敲打痕とともに、表面になにか鋭利なもので擦ったような数条の線条痕(幅2mm弱)をとどめている。本例は砥石との併用も考慮されよう。池端前例でも局部磨製礫にもなって、線条痕を有する棒状の砥石が出土している。岩宿時代の砥石の出土例はごく少ないものであるが、古くから局部磨製礫の用途として骨角器製作具の可能性が言われている現状をみると、実際の骨にのこる解体痕と、砥石(線刻礫含む)の使用痕との比較研究なども重要であろう。

また、鳥山南原遺跡や狸谷遺跡にみられるように、敲石が激しく破碎した状態になっている例は珍しい。作業の性格の一端を示しているのであろうか。

6. まとめと課題

局部磨製礫のさまざまな分布をみてきたが、ここで以上の結果をまとめておこう。

- ①局部磨製礫は全国で16遺跡39点の出土があり、長さ、幅、厚さ、重さの平均はそれぞれ8.5cm、6.5cm、2.1cm、150gを測り、礫形態・法量ともばらつきがなく極めて揃っていることがわかった。磐田原台地の遺跡に特徴的であるが、凝灰岩などの軟質の石材が多く使用されている。
- ②出土遺跡は東北地方南部から九州まで広汎に分布している。なかでも磐田原台地には全体の8割近くが分布し、極端な集中を示している。
- ③出土遺跡はすべてナイフ形石器の時期に属し、なかでも第Ⅳ期(砂川文化)に集中している。
- ④植生帯との関係については、複数の植生帯にまたがって遺跡が分布しており、特定の植生帯との関係は不明である。
- ⑤石器ブロック、礫群、配石との位置関係を検討した。まずブロック内、ブロック外縁部、ブロック外に資料は等しく分布し、ブロックの特定の位置に集中する傾向はない。礫群については礫群内に入るものが1部にあるが、多くはその外縁から外に位置している。配石については、ごく近く(50cm以内)に位置するものが2割、5mまでに4割が分布し、配石とは比較的密接な関係がある。
- ⑥局部磨製礫は、ナイフ形石器、UF、敲石と近接して分布する傾向がある。特に敲石の多さは注目に値する。

以上、局部磨製礫は東北から九州地方までの広い範囲に分布するが、特に東海地方の磐田原台地に多く集中することについては、砂川文化期に多いこととあわせて、当地域、当時期に局部磨製礫を使うある種の流行ともいえるべき文化があったことは確かである。その文化的背景については、自然地理学的環境、石器群、遺構などをさらに詳しく検討する必要がある、今後の課題としたい。

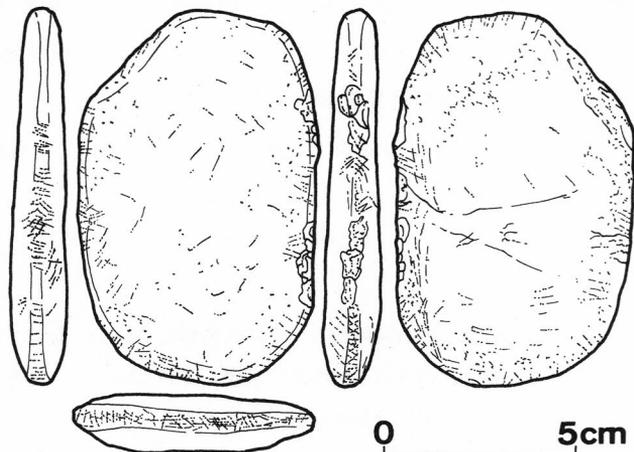
用途については、植物質食料の調理、薬草の調合^(注22)、石器・骨角器の製作などが考えられる。植物質食料の調理については、堅果類を多く産出する冷温帯落葉広葉樹林帯との関わりが明瞭でないこと、縄文時代の敲石類との形態上の大きな違いなどから、現状では否定的である。薬草の調合ということについては、辻秀子氏の研究をみると、北海道十勝川流域に生きるアイヌの可食植物について、植物の食用部分、利用時期、調理・保存方法などの詳細なリストを作成されている。その中で、ウバユリ、ギョウジャニンニクの薬用を代表的なものとしてあげ、アイヌの「薬草の開発はかなり進んでおり、多種多量の薬草が採集、保存されていた。植物資源の利用状況を見ると、食用より薬用植物の種類がはるかに

多く、葉草に関する知識がなみなみならぬものであった」と指摘している^(注23)。岩宿時代についても幅広い植生帯に生育するものを当然利用したであろう。小型で片手にすっぽり収まり、重さも長時間の使用に耐えられる適度なものの(150g前後)である局部磨製礫は、なにかとてもデリケートな作業に使われた印象を強くする。その意味からも、葉用植物利用の、可能性は高いといえよう。

次に石器製作具の可能性を考えると、砂川文化期の遺跡に集中して存在しているという事実は極めて重要である。砂川文化期は発達した石刃技法を特色とし、ナイフ形石器については縁辺部のほとんどに急傾斜な調整加工の施されたものが多い。そういった石器の調整具としての可能性も十分考えられる。ここでもデリケートな作業に適した局部磨製礫の属性は生きてこよう。

なお参考事例として、旧来から調整加工具と考えられている石器に、ストーン・リッターがある。中本遺跡^(注24)、石川1遺跡^(注25)などの北海道の遺跡に多い。石川1遺跡出土のストーン・リッター(細石器の文化期)でみると、扁平な礫を使用する点、側縁に敲打痕や磨面が形成されている点に局部磨製礫との共通点がある(第11図)。相違点は、局部磨製礫の磨面は表面のエッジ部から斜めに入り、あたかも刃部のように形成されているが、ストーン・リッターのそれは、磨面というより細かな擦痕が表裏面に対し直角近くまで擦り減って形成されている点である。さらに、局部磨製礫には鼠歯状の線条痕が明瞭に見られない点もあげておきたい。磨面の角度、線条痕のつけられかたからすれば、鳥谷沢例はストーン・リッターの範疇にはいる可能性もあろうが、局部磨製礫こそ本当の意味でのストーン・リッターとなる可能性もあり、石器の製作実験から学ぶ必要性を痛感している。骨角器の製作具

については、池端前^(注26)、鶴ヶ丘E遺跡^(注27)にみられる局部磨製礫に共伴する砥石や敲石などの使用痕と、実際の骨に残る解体痕とを比較する^(注28)など、データを積み上げていかなくてはならないであろう。岩宿時代における砥石の出土例は僅少で、現状では局部磨製礫との関係は不



第11図 ストーン・リッター実測図

明である。

岩宿時代の局部磨製礫の資料的現実を呈示し、さまざまな分布状況を検討してきた。しかしながら、用途についてすら、状況証拠からいくつかの可能性を指摘するのがやっとという状況である。まだまだ取り組まなければならない課題も多い。第一に、表に点数は示したが、一部実見していない資料を実見しておくこと、第二に、磐田原台地に集中する多く出土遺跡について、分布や他の石器群との関係を詳しく検討すること、第三に、砂川文化期の石器群についての理解を深めること、第四に、ストーン・リタッチャーを集成し、それらの属性や分布状況について詳細に観察することなどが当面の大きな課題と考える。

局部磨製礫という石器は、岩宿時代の敲石類のなかで特異な形態をもっている。そして局部磨製礫は岩宿時代にしか使われることのなかった石器である。敲石類全体がその時代にどのような使われ方をしたのか、さらに日常生活における必需品化の程度を知る上に、敲石類を代表する局部磨製礫の存在はますます重要になってくると思われる。

(くろつば・かずき＝当センター調査第2課調査第2係調査員)

謝辞

小論の執筆にあたり、以下の方々からご援助を賜った。資料閲覧に際しての便宜を図って頂いたり、資料についての問い合わせに適切に答えて下さった池谷信之(沼津市文化財センター)、小林克(秋田県埋蔵文化財センター)、進藤貴和子(磐田市教育委員会)、高杉尚宏(世田谷区教育委員会)、中村由克・渡辺哲也(野尻湖博物館)、松井一明(袋井市教育委員会)、宮井英一(埼玉県埋蔵文化財調査事業団)の各氏。匂坂中遺跡の未発表資料の掲載を快諾された磐田市教育委員会の竹内直文・進藤貴和子両氏によって、今回の資料集成をたいへん充実したものにすることができた。この匂坂中遺跡の整理・報告作業には微力ながら筆者も参加しており、そうしたなかで京都文化博物館の鈴木忠司氏から、局部磨製礫についての貴重な意見を数多くいただいた。同じく共に作業に取り組んでいる小野秀幸君(関西大学院生)との討論からも、特に用途に関する有意なヒントが得られた。以上の方々には心より御礼申し上げる次第である。

注1 先土器時代と旧石器時代という時代名称について、前者は時代の前後関係を意味し、石器の技術および文化の内容を積極的に表現していないこと、後者はヨーロッパの新石器時代の内容をもつ文化が日本には存在せず宙に浮くこと、立川ローム下部に磨製石斧が多くみられ、「打製石器の時代」を旧石器時代としたJ. ラボックの定義と齟齬をきたすこと、さらに地質学上の

更新世に旧石器時代の終末はもはや収まらないことなどの問題がある。岩宿時代という呼称は、土器や磨製石器の有無にかかわらず、また世界の国々とくにヨーロッパの歴史区分とも混乱を生じることなく、その時代の研究内容を深めることができる。佐原真氏の再提唱(佐原1987)や鈴木忠司氏の総括的な論巧(注14)に賛意を表したい。先土器はもとより旧石器の使用は、日本列島史を考える際には避けたい。

- 注2 黒坪一樹「先土器時代敲石類の集成」(『富山県大沢野町野沢遺跡A地点発掘調査報告書』所収、京都、1982年)。
- 注3 黒坪一樹「日本先土器時代における敲石類の研究(上)(下)」(『古代文化』第36巻第3号掲載、京都、1984年)。
- 注4 加藤稔・佐藤禎宏「山形県横道遺跡略報」(『石器時代』第6号所収、東京、1963年)。
- 注5 芹沢長介・中村一明・麻生優『新潟県中魚沼郡津南町神山遺跡調査報告』(新潟県津南町、1959年)。
- 注6 麻生優・小田静夫「静岡県磐田市大藤池端前遺跡」(『人類学雑誌』第74巻第2号 掲載、東京、1966年)。
- 注7 鈴木忠司・山下秀樹・保坂康夫他『静岡県磐田市寺谷遺跡発掘調査報告書』(磐田、1980年)。
- 注8 山下秀樹・鈴木忠司・保坂康夫他『静岡県豊田町広野北遺跡発掘調査報告書』(京都、1985年)。
- 注9 松井一明・松井由美子・進藤貴和子他『山田原遺跡群I』(袋井、1994年)。
- 注10 宮下義雄・高尾好之・工藤均他『広合遺跡発掘調査報告書』(沼津、1987年)。
- 注11 岩瀬讓他『鶴ヶ丘(E区)』(埼玉、1985年)。
- 注12 木崎康弘・隈昭志『狸谷遺跡』(熊本、1987年)。
- 注13 鈴木次郎・矢島国雄「先土器時代の石器群とその編年」(『日本考古学を学ぶ』(1)所収、東京、1978)。
- 注14 鈴木忠司「先土器・旧石器そして岩宿時代」(『古代学研究所研究紀要』第1集所収、京都、1990年)。
- 注15 黒坪一樹「草創期の敲石類集成」(『京都府埋蔵文化財論集』第2集所収、京都、1991年)。
- 注16 進藤貴和子氏教示。
- 注17 注3に同じ。
- 注18 鈴木忠司「素描・日本先土器時代の食料と生業」(『朱雀』第1集所収、京都、1988年)。
- 注19 小野昭・織笠昭・中村由克他『野尻湖遺跡群の旧石器文化I』(長野、1987年)。
- 注20 注12に同じ
- 注21 小野昭・中村由克・山川史子他「骨に残る解体痕の比較」(『考古学研究』第41巻第4号掲載、岡山、1995年)。
- 注22 注9の報文中で松井氏が指摘されている。
- 注23 辻秀子「可食植物の概観」(『縄文文化の研究』2所収、東京、1983年)。
- 注24 加藤晋平・桑原護『中本遺跡』(東京、1969年)。
- 注25 長沼孝・森秀之・花岡正光『石川1遺跡』(札幌、1985・86・87年)。

注26 注6に同じ。

注27 注11に同じ。

注28 注21に同じ。